

ハラハイ湿地におけるタンチョウの現状, 受難の原因と保護

李 曉 民

東北林業大学野生動物資源学院

訳 福井和二

摘要；2000年4月から5月にかけて、ハラハイ湿地におけるタンチョウの個体数、分布の現状を調査した。渡り途中のものも含め、120羽が数えられた。そのうち14羽が夏も滞在し、10羽が繁殖、4羽が亜成鳥であった。これらのタンチョウが受ける受難の原因を分析し、保護対策を提議する。

1. 自然概況

ハラハイ湿地は黒竜江省の西部、龍江県にあり、扎龍自然保護区と同一緯度、西80kmの位置にある(123° 19' ~123° 35' E, 47° 26' ~47° 40' N)。面積64,600hm²で、河川湖沼の連なる平原湿地帯景観を呈し、海拔は139m足らず、高低差1%と平坦、したがって水流は緩慢で湖沼、水溜りが散在している。本区の気候は大陸性で半乾燥性、年平均気温3.5℃、年日照時間2750h、年平均降雨量445mm。気候特性として冬長く、夏短かい、春は早く秋は水浸しになる。主要な土壌の類型は沼沢土壌で、塩分の蓄積した腐植土である。ハラハイ湿地は沼沢と植物の生えた湿地により構成されている。区域内の大小の湖沼は数十個で、通年の湖沼と、季節的に水を湛える広大な水域とがある。湖沼の水深は50~70cm。最大貯水量は4億m³(1998年)、正常年の貯水量は1億m³である。ヨシの生えた湿地が主体で、10,000hm²を超える面積を有し、優勢種はもちろんヨシ(*Phragmites communis*)で、他にクロヌマハリイ(*Eleocharis intersita*)、フトイ(*Scirpus tabernaemontani*)、サンカクイ(*Scirpus triqueter*)などがある。本区の鳥類の生息環境は多様で、特に水鳥には良好な採食環境と隠蔽場所を提供しており、タンチョウの絶好な生息地である。

2. 調査時間と方法

2000年4月1日から5月30日、筆者はハラハイ湿地におけるタンチョウの春季渡りから夏季の繁殖までを調査した。調査方法は高倍率の望遠鏡による定点観察を主とし、付随的に自動車、船を用いたラインセンサスも行った。可能なかぎり毎日払暁から始め、両方法の結果を照合し、重複の起こらないようにした。

3. 調査結果

3.1 渡りの個体数および群れの構成；調査により、タンチョウは毎年3月末に渡来することがわかった。2000年の最も早い渡来は4月3日、最大群れが渡来したのは4月18日12羽であった。観察された最大個体数は21羽で、12羽、4羽、3羽、2羽の群で構成されていた。4月3日から12日までの計9回の観察で、総数120羽を記録した(表1)。

4月18日から5月25日までの間、タンチョウ群の構造の観察した。成鳥、亜成鳥、幼鳥の混群で、家族群が識別できない群と、家族群として幼鳥、成鳥がはっきりと識別できる群とがあり

表1 2000年春ハラハイ湿地における観察日ごとのタンチョウの個体数

日付	4/03	4/10	4/18	4/20	4/21	4/23	4/25	5/03	5/12
個体数	2	8	21	13	16	20	16	12	12

表2に示す。

表2 ハラハイ湿地におけるタンチョウの家族群の構成

日付	2成2幼 家族	2成1幼 家族	1成1幼 家族	2成 家族	亜成鳥, 成鳥 幼鳥混群	合計
4/18	1 (4)	1 (3)		1 (2)	1 (12)	21
4/20	1 (4)	1 (3)		1 (2)	1 (4)	13
4/21		2 (6)	1 (2)	1 (2)	1 (6)	16
4/23		2 (6)		4 (8)	1 (6)	20
4/25		1 (3)		4 (8)	1 (5)	16

3.2 繁殖個体数；筆者は5月24日から5月29日の間、ハラハイ湿地におけるタンチョウの繁殖状況を調査した。本区でのタンチョウの繁殖は5対、他に4羽の亜成鳥群が生息しており、合計14羽がこの期間に生息していた。繁殖鳥のテリトリーは広く確保され、非繁殖鳥の行動範囲はさらに広く、繁殖鳥のテリトリーへ侵入することはない。

4. タンチョウの生息に影響する主要な要因

4.1 湿地の水位低下；1998年に嫩江流域に発生した大洪水では、ハラハイ湿地の水位は平常時より3mも高くなった。湿地の全てが水没してしまった。1999年大洪水の再発防止のため、湿地東部の水門を開放して、1年がかりで水位の調整をおこなった。1999年6月、観察時のヨシの生えた湿地の水位は30~50cm、^{レンマボ子}荷麻泡子の水深は2mほどであった。2000年5月の観察時では、前述のヨシの生えた湿地は完全に水がひき、地下80cmまで水位は下がった。周辺の湖沼も相応に水深が浅くなった。ヨシの草丈も昨年に比較して20~30cm低くなった。タンチョウの繁殖適地も半分に減少し、タンチョウは残された水辺の近くを選択し、繁殖せざるを得なくなった。

4.2 食物減少；1999年冬、水位は低下し、結氷時の荷麻泡子の水位は1.5mに充たない。これにより、ドジョウ (*Misgurnus malay*)^{*1}、花鰻 (*Cobitis hutheri*)^{*2}と葛氏鱧塘鰻 (*Perccottus glehni*)^{*3}を除く他は、全て凍死してしまい、春季の解氷時、湖面に魚の死体が浮き、その数は数十万kgに達した。また、旱魃の時には湿地中の水生生物が大量に死亡する。これらによりタンチョウの食物に大きな影響をもたらす。

4.3 農業開発による深刻な人為的干渉；元ハラハイ軍馬牧場と香港和記公司連合でハラハイ湿地を水田として開発している。連合の開発期限は30年である。1999年までに湿地の中心部に長さ15km、幅8mの道路を造成し、道路の両側に十数本の幅5m、深さ2mの排水溝を作り、嫩江へ至る総排水溝へ接続された。計画による開発面積は8000hm²で、これはハラハイ湿地の中心部の40%、沼沢の60%以上に相当する面積である。現在進行している開発面積は4000hm²である。このように、ハラハイ湿地は取り返しのつかない状況となっている。タンチョウの重要な一息地が将来に消滅しようとしている。ハラハイ軍馬牧場は一部の土地を私人に請け負わせ、請負人は比較的乾燥している草原湿地を選択して開墾し、湿地の生態環境に重大な変化をもたらし、湿地に繁殖する動物の生息は極限状態の影響を受けている。その他に、漁民の盛んな漁業活動もタンチョウの生息に大きな影響を与えている。

4.4 ヨシの収穫と野焼き、ハラハイ湿地の開発を請け負った私人たちは、毎年春秋にヨシの刈り取りに適さない残り残しを野焼きにさらし、タンチョウの生息地を破壊し、タンチョウは繁殖の適地を求めて他所へ移っていく状況である。

5. ハラハイ湿地の保護措置

ハラハイ湿地は現在、未曾有の大破壊を被っており、これは周辺地区の生態系に直接の影響を与えているばかりでなく、人々の生産活動にも影響を与える結果となっている。この湿地の速やかな保護がまたれる。

湿地の保護に直接有効な方法は保水である。ハラハイ湿地の主要な排水口は東部の瀉洪閘^{シエネンザ}である。2000年の湿地乾燥の原因は瀉洪閘により、まるまる1年排水したので水位の異常な下降をきたし、湿地の乾燥をまねいた。したがって湿地保水のためには閘門を閉めるべきである。

断固として湿地の開発を抑止し、特に農業の開発はやめるべきである。湿地内の過度の漁獲と人為干渉を制限し、タンチョウその他の水鳥のための安全な生息環境を提供すべきである。

毎年秋に行われるヨシの刈り取りは水鳥に考慮し、特にタンチョウの生息環境には特別の注意を払うべきで、繁殖のために一定の生息環境を確保しなければならない。

訳注

- *1 本報告書では泥鰌(ドジョウ, *Misgurnus moloii*)となっているが、辞海(生物分冊)では泥鰌(*Misgurnus anguillicaudatus*)とあり、日本のドジョウと学名は同一である。分布も中国全土となっており、*Misgurnus moloii*は見ることができなかった。
- *2 花鰌(*Cobitis hutheri*)日本ではシマドジョウ(*Cobitis biwae*)があり、他にアジメドジョウ(*Cobitis delicata*)が生息している。辞海(生物分冊)では、花鰌(*C. taenia*)が分布するとあり、花鰌(*Cobitis hutheri*)は検索できなかった。シマドジョウ属の魚類と思われる。
- *3 葛氏鰌塘鰌(*Perccottus glehni*)辞海(生物分冊)で検索できなかった。鰌はライ魚であるから、その同属と思われる。